

移民受け入れと、ネオナチ

奥岡 曹太郎

2011年7月22日、テロとは縁も所縁もないオスロで起きた、アンネシュ・ブレイベクの政府庁舎爆破と、ウトヤ島での銃乱射事件はまだ記憶に新しい。ほぼ単独でビルを大破させる遠隔爆弾を製作し、計77人を終始冷静に射殺してゆく冷酷かつ正確な犯行は貴志祐介の『悪の教典』を彷彿させる。

なぜ、これほどまでに残酷な犯行に及んだのか、アンネシュ・ブレイベクはヨーロッパ覇権回復運動を喚起させるためであり、殺害した77人は必要な犠牲だったと語る。勿論、大衆の注目を浴びたいだけのナルシストが取った、自己中極まりない犯行だと断定する専門家も数多くいるが、その直後にドイツで起きたある政治集団による犯行を見ると、彼の思惑が成功したと見ることもできる。

もう一つのテロ

ドイツには今でも少数ながら、故ヒトラーの信奉者がおり、日々活動している。彼らは親衛隊（SS隊員）の制服を着、胸にトレードマークの鉤十字を飾り、世間は彼らを「ネオナチ」と呼ぶ。

そのネオナチに属する3人組がオスロテロの直後にトルコ人8人、ギリシャ人1人を殺害する事件が起きている。

一見何の関連も無さそうなこの二つの事件には、一つの現代ヨーロッパが抱える深刻な問題のつけが回ってきたことを露呈するものであった。

回ってきたつけ

第二次世界大戦後、都市という都市が空襲で瓦礫の山と化し、畑という畑が戦車と砲弾で踏み荒らされ、荒廃しきったヨーロッパをドイツ人はゼロから復興しなければならなかった。

それをたった三十年でユーラシア大陸一の経済大国にまで成し遂げた『奇跡の復興』は、ドイツ人の勤勉さと質実剛健さを誇る所である。しかし、そんな輝かしい栄光が大量の移民による肉体労働の上に乗っている事を忘れてはならない。

『奇跡の復興』が続いている間は増え続ける雇用を埋めようと必死に募集していた外国人労働者も、一度成長が止まってしまえば縁の下の力持ちから、御荷物でしかない失業者となってしまう。さらに、東西ドイツの統一により、東ドイツに溢れていた失業者をも西ドイツが面倒を見なければならぬよ

うになり、ドイツの失業率は一気に20%近くまで跳ね上がってしまった。また、その20%の内の8.7%が移民であったため、移民はドイツ人に白い目で見られるはめになる。特に数の多かったトルコ人は自らのコロニーを作り、閉鎖的社会に閉じこもるようになってしまった。

旧東ドイツ人の劣等感

そんな悲惨だった失業率も、超現実重視の政治家による政策と頑固な職人気質がグローバル経済の売りになり、現在では1桁台にまで回復している。一方ドイツ人の移民に対する意識は表面的には和らいだが、無意識のレベルではまだまだ冷たいものだった。

とくに、旧東ドイツは未だに旧西ドイツよりも失業率が2倍近くあり、同じドイツ人でありながら移民と同じ国家の御荷物であるという劣等感を拭えないでいた。

故に、東ドイツ人の鬱憤は自然とトルコ系移民に向けられる。この鬱憤を組織化したのが今のネオナチである。

ケバブ事件

ナチス一党独裁体制の間、ユダヤ人が常にドイツ帝国の繁栄を妨害してきた民として、迫害もしくは虐殺され続けてきた。それが現在はトルコ人に対し、下がらない失業率の根本的原因としてネオナチを初めとするドイツ人が差別と偏見を持つようになっている。

一方のトルコ人自身もドイツ人との同化が認められず、為すすべを無くしている。そんな中苦し紛れに作ったのが、郷土料理をドイツ風にアレンジした「ケバブ」である。このケバブはドイツ人のなかで一定の人気があったが、同時にトルコ系移民の代名詞となった。

ケバブがあるところにトルコ人がいる、というトルコ人にとってはドイツ人との同化とは正反対のトルコ人としての自己主張を高めてしまう結果となった。故に、ネオナチはケバブ店を標的の中心としてトルコ人に攻撃を仕掛けるようになった。特に旧東ドイツのケバブ店は被害が大きかったという。この一連の風潮をケバブ事件と呼び、未だに解決されていないヨーロッパ移民問題の象徴となっている。

爆発した鬱憤

風潮は時が過ぎれば薄くなる。ケバブ事件も最近までは過去のものとなっており、ネオナチはドイツ人にとって教養のない若い失業者集団でしかなかった。

だからと言って、ネオナチ達の鬱憤も薄らぐわけではない。逆に世間からのけもの扱いされた鬱憤が溜まる一方だった。

そんな時に、オスロテロは起きた。そしてネオナチの三人は、トルコ人を8人、ギリシャ人を1人と立て続けに殺したというわけだ。

この経緯から見ると、これらのテロ事件はドイツに限らず、移民を受け入れている国ならどこでも起こる可能性がある。もちろん日本もこれに含まれる。

隔離か同化か

では今日世界中で深刻化している移民問題をどのように解決していけばよいだろうか。

答えは二通り考えられる。それは、隔離か同化かだ。

隔離はただ単に問題の先送りでしかないが、これが実践されているのが今までに説明したトルコ人の場合である。彼らのコロニーは年々周辺のドイツ人からますます距離を置くようになっており、隔離の一途をたどっている状況であり、まだまだ解決の目処が立っていない。

もう一方の同化は、ドイツのユーゴスラビア人である。かれらは、1991年に起きた、ユーゴスラビア解体紛争から出た難民であり、ドイツがヨーロッパ最大の難民受け入れ国となっていた、これは一見賞賛に値する政策に見えるが、前にも言った通り、『奇跡の復興』の真ただ中であっただけで、増え続ける雇用の穴埋めをしたかっただけである。しかし、彼らも大半が後に失業者となるがトルコ人とは正反対の同化への道を歩み、もはや今日では移民としてのユーゴスラビア人は殆ど存在しない。

内面的差異主義の風潮

両者の道を分けたのは何だったのか、それは宗教の違いである。

ご存知のように、トルコ人はイスラーム教(かなり熱心でない方に属するが…)一方のユーゴスラビア人がキリスト教である。そう、ドイツ人はイスラーム教徒であるトルコ人を拒絶し、キリスト教徒であるユーゴスラビア人を受け入れたのである。

この理由について、フランス人のエマニュエル・トッドがある理論を導き出している。

彼は、世界のあらゆる社会的現象を当地域、民族の家族構成で読み解こうとする実にユニークな人口統計学博士で、このドイツの移民問題についても、ゲルマン民族の家族構成からこのような結論を導き出している。

ゲルマン民族は、アメリカの平等核家族とは異なる、権威型不平等家族を構成している。この権威的不平等家族とは、日本と同じ、父親を絶対的存在とし、遺産は長男に大きく偏って分配する家族(今ではアメリカと同じ、父母平等で、遺産も平等に分割される家族が多いが)のことである。そして、平等核家族に発生する差異主義は外見に比重を置くが、権威的不平等家族で発生する差異主義は内面に比重を置く。つまり、アメリカを初めとする平等核家族の多い地域では眼や肌の色を差別の対象とするが、ドイツや昔の日本のような権威的不平等家族の多い地域では宗教や専門とする職業を差別の対象とするわけである。

ゆえに、ドイツではトルコ人とユーゴスラビア人は両者とも、地中海に属する民族であるため、大きな外見的差は存在しないが、属する宗教の違いが隔離か同化かの明暗を分けたのである。

差異主義とは

そもそも、差異主義とは何か、そしてどうして差異主義は発生するのだろうか。

まず、差異主義とは、自らの属する集団の特徴を長所とし、他の集団の特徴を短所と見なす事によって、自らの自尊心を守ろうとする風潮のことである。ここで、挙げられる特徴は前項で言ったように、目や肌の色を初めとする外見的特徴から、属する宗教や社会的階級などの内面的特徴など、地域、民族によって様々である。

次に、なぜ差異主義は発生するのか、これはなかなか理由を特定するのは困難だが、差異主義が発生するという事を言いかえれば、他者を軽蔑しなければ自尊心を守れないということである。これは、個人的性格という問題ではなく、自身の属していた家族構成に対する矛盾の犠牲になったということではないかと推測する。

例えば、平等的核家族では、個人の自由が最大限に容認される為に、両親の離婚が相次ぐ傾向がある。これを幼い頃に経験したことから、本人が原因を自覚していなくても、無意識の段階で何かしらの心理的重荷を背負っており、自己防衛の為に、他者を傷つけてしまう傾向もまた多いと考えられる。対する権威的不平等家族の場合は、父親との対立、兄弟間での憎悪が大きな心理的負担になる事が多い。

このような、家族構成の根本的な矛盾、欠陥が大きな社会問題の発生につながると考えることもできる。

普遍主義という解決策

それに対して、万人は根本的には皆同質であると考えるのが普遍主義である。この普遍主義を用いて、大繁栄を極めた国がある。ローマ帝国である。

彼らは、情報伝達技術が発展していないなか、遠征に出かける世界は完全に未知なる世界であった、自分の倍ぐらいの背丈をし、青い目を持った、ゲルマン人や、肌が真っ黒なネグロイドと戦うという事は、ほとんど、宇宙人に対して侵略戦争を仕掛けるのと同じであった。しかし、そんな宇宙人たちを征服し、共同生活をしていく中、彼らはしだいに隣にいる宇宙人は同じ人間であるという事を自覚していく。そしてついにカラカラ帝に至っては、その全宇宙人にローマ人と同じ市民権を与えるにまで至っている。

これほどまでに寛容なローマ帝国の姿勢はラテン人特有のものらしく、ラテン人の無意識の底にある普遍主義がローマ帝国の諸民族での分裂を数世紀に渡って起さなかった根本的理由であろう。

この無意識に潜んでいた普遍主義を意識の世界にまで引っ張り出したのが、フランス革命前後に流行した啓蒙主義ではないだろうか。そこに含まれる人権と言うアイデアは、まさに普遍主義を意識化したものであり、この意識は、国連で採択された世界人権宣言に息づいている。

しかし普遍主義を支持する意識と、差異主義を求める無意識との葛藤は、現在でも私たちが苦しめ続けている。